うろこアンソロジー　二〇一一年版

うろこアンソロジー二〇一一年版　目次

棘　足立和夫　3

熱紙にキミキス、ウシジマの軌道ラウンジ、　反現代死　6

ステップアップ　南原充士　9

雨が降ったら　有働薫　12

人生　若井信栄　15

小さな叫びだけれど　一瀉千里　16

思い出に浸ると死んでしまう14　平井弘之　19

水面　中村えつこ　22

わがこころのうちに住まうひとびと、２０１１年３月のこと　冨澤守治　25

棘

足立和夫

しずかな沈黙が昂っていた
草たちの
かすかな呻き声は
宇宙の空にひびき
吸いこまれて消えていく

いのちたちは
その炎を燃やしつづけて
どこかに居を定めることもなく
空間を何億年も放浪しているのだ
なぜだろうか

滅びてしまってもかまわない
奇怪ないのちが
おわるのなら

星たちの
ひかりの道を断ち切っても
かまわないのだ

むかしから
宇宙の苛酷な冷たさは
わたしたちの
いのちの熱を
ひかりを
奪いつづけている

奇怪な謎につらぬかれたわたしたち
その不可思議の棘がなければ
生きられないわたしたち

いのちたちは
あきらかではない深さの
暗さの先を
凝視したままだ
そこに何かが在るかのように

神秘という暗黒から
ざわめきが聴こえるから
奇怪なわたしたちは
呻きながら
棘のように存在している

熱紙にキミキス、ウシジマの軌道ラウンジ、

反現代死

マリスミゼルのザラキを再起動させるためには己の尿道に潜むバクテリアコロンブスの比類なき瞬きのチェーンソーをユーレイ国家的に行使し奇術師ニシオイシンの大河ドラマの義眼の美学を猛烈に圧し折る（怒涛の合格）というミラクルバージンロードを根元から認証し読経し爆笑しなければならないように、台湾の中間荒野党を敬愛する魔女っ子願望の強いリーという非正規官僚の知人の親友の知人の親友が気だるく知人の親友の熟女売春を写生しながらクールビズで管理している無色

透明なコスギャラリーの（大日本人に破壊された）駐車場の設計図内でモモーイなオシリのカブトムシの幼虫をマイケルジョーダンみたいに突き出すうしじま尊氏がパフュームの「資本と述語」の要点を肉棒なしで温めるためには宇宙眼鏡をつけないでホリエモンの惑星の電子書籍部をブラなしで訪れ一人残らずとりあえず殺しまくる狂暴なミノモンタを喚起させるリズムで巨大なポールダンクを決め障子の向こうに避難した学識豊かな五百十八人のエグザイルと松尾芭蕉のスカトロジーの感応のドンタコスとして脳髄の交接を果たさなければならない。スマイルセラピストの被爆はアップルコーポレーションの軌道上でセクシーにファンタレモンを浴びるウタダヒカルの卵巣の深淵を陳腐なＮＨＫから覗こうと

するイツキヒロシのハクナイショーの閃光に
よるものなのだから。

ステップアップ

南原充士

跳び箱一段　飛びました
跳び箱二段　飛びました
跳び箱三段　飛びました

一気に十段　飛べるかな

助走をつけて　思い切り
飛ぼうとしたけど　つまずいた

やっぱり身長足りません
筋力なんかも不足です

川沿いの道　走ったり
マシンを使って鍛えたり
スイミングなんかもとりいれた

ステップアップはこわいけど
ステップアップしなければ

高いところが見えません

きっとその日がくるだろう
わくわくしながら　空高く
舞い上がるような心持

転がり落ちることなんて
忘れてしまう　気持ちよさ

そんな気がする
そのときまでは

体を鍛えておきましょう

ステップアップできるかな

雨が降ったら

有働薫

雨が降ったら行くよ
夕方　薄闇にまぎれて

家には入らない
家の屋根か　フェンスの陰に
ひっそり

ガラス戸にうっすら
月夜の影法師のように
踊っているのが見えたら
小さい声で

泣く

「今晩は待っていないでください。夜は黒く白いでしょうから*」

晴れて
星がつめたく輝く夜は

それがなんだかわからないけど
からだのなかに
衝動が
はげしく燃えあがって

ごうごうと深海をながれる
親潮と黒潮の分厚い層のめくるめく交差
めがけて

走る

（わたしのなかはからっぽ
ただ恋する気持ちだけ）

＊　ネルヴァルが叔母に宛てた最後の手紙

人生

若井信栄

食事
もくもく

労働
もくもく　もくもく

疑問
もくもく　もくもく　もくもく

小さな叫びだけれど

一瀉千里

元安川の闇は暗い
暗い川を　色とりどりの盆灯篭が流れてゆく
遠くに　浮かび上がる原爆ドーム
浴衣姿のおさなごは
その小さな手を　暗い川に向けて静かに合わせる

あの日の魂は戻ってきた
あの日のことがよみがえる
帰り際の　魂たちが
振り返って呟いている
二度と　あの日のようなことが

決して　起きませんように

多くの手が魂たちを見送る
元安川に　手を合わせる

炎天下のもと
アメリカからおとずれた大使たちは
その　汚れた手を合わすのを
いまだ　ためらい続けている

失われた命が　少しでも報われますように
この世に　地獄があるならば
あの日の地獄と　つながりませんように
祈りの呪文が　世界を駆け巡るとき
何千万羽の折り鶴が　遠い空から飛んでくる

偽りのない祈りが　人々の心に
ちゃんと根づきますように
誰のこころにも　まことの祈りとして
わずかな叫びだけど
今日も密かに　したためます
元安川へ　流します

思い出に浸ると死んでしまう14

平井弘之

首から竜が生まれる
ひとあしひとあしいいや
かたあしかたあし
あたしには若さだけがない
林檎を焼いておくれな
わかい娘さん
その林檎熱いうちにむさぼって
唇も舌も火傷した
首から竜が生まれる
娘さん
扉をあけて

ひとあしひとあしいいえ
かたあしかたあし
あたしには若さだけがない

昔まだわかい妻と花園神社の境内を歩いていた
首から竜が生まれる
ひとあしひとあしいいよ
わっかい頃はそれこそ脚なんぼんも投げ出せた
ふたあしみあしよあしごあしと
どこまでも行った
兄さんたちにはすこし脅かされちまったけどさあ
そんなに悪いふうにも
こあい風にも視えんかったよお
あたしには仕合わせだけがない
従姉妹たちは違ったでなあ
贅沢もしたかったあ

倹約もしてみたかあ
一途にも生きてみたいやなあ
ひとあしひとあしいいや
かたあしかたあし
首から竜が生まれる
この店を出たら
もう誰とも話すこともないんよ
さてと今夜は花園神社をぶうらりとしてかえるかなあ
首から竜が生まれる
かたあしかたあし
・・・
脚がとまる

水面

中村えつこ

連れ立って
池のほとりをあるいていくとき
かたわらのヒトの口から
ひっきりなし発生するコトバの泡を
ワタシがつかみそこねているうち
頭上を横切る一羽のコトリ
コトリから
青空が生まれるのをワタシは見る

コトリが
地上に落とす不意の影の大きさは

ひっきりなし発生する
ヒトのコトバの口をのがれてワタシが見る
水の上にねむる
アカンボウの
しずかなわらい

めくってもめくっても一枚の水面を行き来する
ねむるアカンボウの
わらいのような
波紋

めくってもめくっても一枚の青空が渡来させる
コトリ
コトリがワタシの頭上を移動するとき
地上の影は払われ
池ではじょじょに

水にからだが沈みはじめたアカンボウの
見開かれた目が
虹色の泡を映しだすのを
ワタシの位置にきてコトリ
コトリは見る

わがこころのうちに住まうひとびと、２０１１年３月のこと

冨澤守治

悲哀なことを語ろう
この年があらたまるとき、これだけは書いておかないといけない

「ひと」は想い出のなかに生きている
私であれ、ほかのひとであれ、それはすべてのひと
想いが、憂いのなかにあれば、それはすべてのひと

悲しみに暮れるひと
それははたまた悲劇と非業を生きるものである、詩人のようでもあり
息をしては、こころを吐き出している
うら暗い想いにつまされて、苦痛のなか

悲哀の雪にまみれる

この年はそれこそを云わなくてはいけない

どうすれば、いまも聞くことができるのだろうか?あの懐かしい声を
思い出すたびに胸がしめつけられる
いくら涙しても悲惨な春の声の鳴り止まない、このしずけさ
それは今も残っている
かつてあったものの光景

こんなことはかつてなかった

われわれは見ていた、そしてそのほかのことはできなかった。あの寒い春のこと
無事でいつもとかわらぬ雑踏のなかにも、呼ぶ声が絶え間なくこだました
答えることもせず、無言でなけなしの身についていた金銭を寄付していた
いくつもの呼び声に応じては何度も何度も、まだ寒冷のなか、不安なまま

祈るようにして募金箱に投げ入れていた

さらにわれわれの見ていたものは
尋常のレベルを越えるひとびとの強さと秩序
めくるめく日々の痛みにもめげることなく
この暴風においてかき消されぬものたちよ

こんなことはかつてなかった

われわれは見ていた、外国の軍隊を歓呼の声をもって呼びかけた
彼等の勇気と行動の激しさと確実さを
自衛隊たちの努力、そしてさぞ辛かっただろう
個々の人間である隊員のひとたちは、どうしてこのときを過ごしていたのだろうか

かつてないほどの騒然さ

原発事故、危機管理に一言あるものは驚かざるを得なかった
肝心なことは最後にわかるという、有りよう、有様
説明能力の有無は、行動と判断能力の有無を示す
さらに危機を避けるのは、通常ヒロイズムであるが
それこそは孤独で、危ない橋をわたり、失敗する、それとパニックを招くだろう
しかもそれから逃げることも許されない

われわれが現実に見たものはそうではなかった
見たものは現場の壮絶さだけだった

幾人もの英雄的な行動を見た
記憶に焼き付いて残るひとびと、そして名も無きひとびと
鎮魂の願いはいつまでも果てることがない

こんなことを書いたことはなかった
ただ私にはこれがはじめてでもない

16年前の阪神を襲った地震、自分も足に怪我をしてうなっていた
本震のなか駆け降りた階段は、丸く見えた
時空が崩れたのでもなく、四隅は消えていた
激痛をこらえ、母にバイクのヘルメットを被せて家を出た
今度もきっとそうだったのだ
そして確実で戦慄したであろう死も多くあったのだろう
恐ろしい、恐ろしいだけでなく
忘れられないし、忘れてはいけない

わたしたち詩を書くものたちに何ができるのだろうか
自問は続いているが、その無力さにも驚く
せめて語り継ぐか？
この年のことを忘れてはならないようにして

―「ひと」は想い出のなかに生きている―
―私であれ、ほかのひとであれ、それはすべてのひと―

―想いが、憂いのなかにあれば、それはすべてのひと―

言葉はまるで老人の繰り言のようだ
しかしそれに共鳴することこそ、ひとの道だろう